

コードポエトリーにおける記号転位とパース記号分類の応用

荒川 零一（情報科学芸術大学院大学 [IAMAS]）

発表要旨：

コードポエトリーとは、プログラミング言語で記述されたソースコードが詩として読まれ、その実行も含めて鑑賞される電子文学の一形態である。現在この分野には、作品・注釈・実行環境を共有する再現可能コーパスがほとんど存在せず、また記号論などの理論的枠組みに基づいた分析も限られている。本発表は、こうした課題に対して、チャールズ・S・パースの記号分類理論を適用することの有効性を検証した成果を報告する。

先行研究として、N. Katherine Hayles はテキストと実行の階層性をメディア論の観点から論じた[1]。Mark C. Marino は『Critical Code Studies』において多様なコードを意味あるテキストとして精読し、その文化的・政治的含意を分析する枠組みを人文学的な方法論として提示した[2]。一方、記号学的なアプローチとして、田中久美子はソーシャルおよびパースの理論をプログラミング言語に適用した[3]。これらを踏まえ、本研究ではコードポエトリーに対してパースの記号分類（Icon / Index / Symbol）を応用し、各構文要素を分類した。具体的には、リテラル値やコメントを Icon、変数や関数名などの識別子を Index、型・予約語・演算子など構文規約を示す語を Symbol に対応させた。さらに、コードの実行によってこれらの記号分類が変化する現象を「記号転位」と定義し、コードポエトリーの詩的效果との関係性を分析した。

分析対象には、アンソロジー『code {poems}』[4] に収録された 55 作品のうち、実行環境が現存するものを用いた。構文ごとに「静的な記号分類」「実行時の記号分類」「記号転位の有無」を注釈し、加えて各行に対する読者の第一印象や詩的解釈を記述した。これにより、記号転位が鑑賞の焦点となる傾向を示すと同時に、パース記号論がコードポエトリーの解釈に有効な枠組みとなる可能性を確認した。

初期的な分析からは、記号転位が読者の注目箇所と重なりやすい傾向が見られ、コードの詩的效果と記号的変化の関係性を探る上で、パースの記号分類が有効な枠組みとなる可能性が示唆された。また、構文注釈や視覚化ツールの整備は、今後のコードポエトリー批評・創作における共有リソースとなりうる。

本発表では、注釈ルールや転位の定義の妥当性について意見を募りつつ、理論的基盤の検討を深めたい。

[1] N. Katherine Hayles, “Print Is Flat, Code Is Deep: The Importance of Media-Specific Analysis,” *Poetics Today* 25, no. 1 (March 2004): 67–90.

[2] Mark C. Marino, *Critical Code Studies* (Cambridge, MA: MIT Press, 2020).

[3] 田中久美子『記号と再帰——記号論の形式・プログラムの必然』東京：東京大学出版会, 2011 年.

[4] *code {poems}*, edited by Ishac Bertran (Barcelona: Impremta Badia, 2012).